

投稿

本誌前号（『広大フォーラム』二十六期八号）に掲載された内野誠氏の文章「アホにならないで」に反論を述べさせていただきたい。内野氏がこの文章全体を通じて、新入生に對して、大学での四年間を有意義に過ごすようにアドバイスし、また、その手段として各種サークルに参加するよう訴えていること自体に異論のあらうはずはない。しかし、内野氏が、その趣旨を述べるために、「西条は何も無い所」との発言を、短い文章の中で二度にわたって繰り返していることは見過すわけにはいかない。

氏の言うように、「西条は何も無い所」だろうか？筆者はそうは思わない。本学キャンパスの造成などでかなり損なわれたとはいえ、この地には、都會ではとつゝの昔に失われた豊かな自然が残されている。筆者は、自分の研究室などから遠望する田畠と山林の織りなす西条盆地の景観を、こよなく愛している。一方、西条駅周辺にはいくつもの大型スーパー、マーケットがあつて、たいていの買い物はここで用足りる。また、西条駅と大学とを結ぶブルバールには、若者向きの衣料品店など次々に新しい店が開業しつつある。

もちろん筆者とて、我々のキャンパスが立地している西条という町が、学生諸君や我々教員の勉学・研究上および生活上のさまざまなる要求に百パーセント応えてくれている、などと言うつもりはない。特にキャンパス周辺は、夜となると女性の一人歩きもはばかられるほどの人気（ひとけ）のなさである。自動車などがなければ、食糧の調達さえまらない状況は遺憾に思つてゐる。

ブルバールからキャンパスに沿つて、しゃ

れたブティック、レストランや喫茶店、外国语で書かれた書物や専門書を多数展示販売している書店や古書店、話題の映画を上映しているミニ・シアターなど、いろんな種類の店・施設ができればと願つてゐる。また、既存の町並みとの調和をはかりつつ、道路計画などを勘案しながら、学生アパートをキャンバス周辺に計画的に配置・建設しておれば、交通事故の多発という現在直面している残念な事態も多少は緩和されていたのではないかと。今からでは遅いだろが愚考したりもする。

しかし、そもそも西条の地に移転してきたたまでは、都心から郊外へと

して来るずっと前からこの地で暮らしてこられたのである。

また、世界の大学の歴史をみてみると、なるほど中世大学や近代大学は町の中に立地していた。そこから「ガウン（大学）とタウン（町）の争い」などという言葉もうまれた。しかし、二十世紀以降、特に第二次世界大戦以後、大学は規模拡大に伴つて、移転であれ新設であれ、都心を離れて郊外に広大な敷地から成るキャンバスを立地する事例が増えていく。大学・高等教育の大衆化＝規模拡大が避けがたい趨勢である以上、都心から郊外へと

して来るずっと前からこの地で暮らしてこられたのである。

しかし、このような無神経さは、一人内野氏だけのものではない。それどころか、学生諸君の間だけでなく我々教職員の間にも、自らが「洗練された都会人」であることを強調するレトリックの一部として、同種の無神経な言説が横行している。「洗練」と「無神経」の同居とはブラックユーモアだが、それが学内にとどまっている限りは、大学人の世間知らずないしは一人よがりと嗤つて済ますこともできよう。しかし、印刷物として世に出てしまつた以上、しかも、ようやく統合移転が完了し、地域社会と協力して真の総合大学をつくりあげていこうとしている時点で、ほんならぬ『広大フォーラム』に掲載された発言に對しては、批判の一文を草せずにはおれなかつた次第である。（なりさだ・かおる）

（付記）
筆者は、現在広報委員会のメンバーであるが、拙論は、広島大学の一構成員もしくは『広大フォーラム』の一読者としての意見であつて、広報委員会とは無関係である。また、ささやかながら論議を提起した者として、内野氏ご自身からの反論、あるいは拙論に異論をお持ちの方からの批判を切望している。

のは我々広島大学なのであつて、西条の町、あるいは東広島市の市民の方々は、長期にわたる大学移転に伴うさまざまな混乱の、いわば「被害者」ともいえるのである。それでもかわらず、五月三日に放映されたNHKの新日本探訪「街にキャンバスが来て～東広島市農民たち」でも紹介されていたように、当地の方々は、おおらかであると同時に細やかな心配りで我々大学関係者に対応してくれきつている。このおおらかさと細やかさは、前述した当地の豊かな自然と無縁ではあるまい。

このような事情を考えると、東広島市民

「西条は何も無い所」か —内野氏の発言に寄せて—



いう流れは不可避であつたといえよう。
我が広島大学も、そのような流れの中で西条移転を立案実施したわけである。しかも、西条キャンバスの場合、JRでわずか三十分の距離に百万都市広島がある。東京や大阪といった大都会でも、繁華街に出るにはそれくらいの時間はかかるものである——いくばくかの想像力と行動力を前提にすれば、郊外型のキャンバスの中では西条キャンバスが比較的恵まれた条件を有していることは、自明であるまい。

（付記）
筆者は、現在広報委員会のメンバーであるが、拙論は、広島大学の一構成員もしくは『広大フォーラム』の一読者としての意見であつて、広報委員会とは無関係である。また、ささやかながら論議を提起した者として、内野氏ご自身からの反論、あるいは拙論に異論をお持ちの方からの批判を切望している。